

# 2017 年度 小委員会活動成果報告

(2018 年 3 月 3 日作成)

<b>小委員会名</b>	農山漁村文化景観小委員会	主 査 名：工藤和美 就任年月：2014 年 4 月
<b>所属本委員会 (所属運営委員会)</b>	農村計画委員会	委員長名：山崎寿一
<b>設 置 期 間</b>	2014 年 4 月     ～    2018 年 3 月	
<b>設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)</b>	<p>農山漁村の文化的景観保全の取り組みが国内外各地で進められている。本小委員会委員は国内の先行事例に直接参画していたことから、2006年度から事例研究交流を行い保全の成果・課題の考察、保全に必須の地域主体に着目してきた。2011年度には委員会活動成果をまとめ書籍を出版した。また大会研究集会等を通じ文化的景観保全にどのような展開が期待されるか、とくに建築、都市・地域づくりの視点から学術的な議論の場を継続するとともに、それらを現場へ伝達し実際の保全活動の進展を技術的に支援する手法として、座学と現地調査の連動を前提とし委員会と地域主体が共同で開催する「フィールドスクール」のスキームを案出し、2011年度から開催している。新たに設置する小委員会では、これまでの活動を継続発展させつつ、国際的な動向のなかで文化的景観保全を学術的に再評価し、海外事例との交流を行うことで、日本の農山漁村の文化的景観保全の特色と有効性についてひろく国際的な認識を得ることを目的とする。</p> <p><b>初年度：</b>国際的な情報発信の手法の検討とその初動の取り組みを行う。研究集会を活用して、海外事例の実務担当者との議論の場を設ける。フィールドスクールの開催シリーズ化を継続し、同時に海外事例地での開催準備を行う。</p> <p><b>2 年度：</b>初年度の活動にもとづき、海外事例地でのフィールドスクールを試行的に開催する。これを通じて、文化的景観保全に関する国際的で継続的な議論の機会の運営手法について検討する。</p> <p><b>3 年度：</b>引き続きフィールドスクール開催を継続しつつ、委員の再構成および公募を行う。HP 等による情報発信の充実、継続的な議論の機会の実装に取り組む。</p> <p><b>4 年度：</b>上記の国際的で継続的な議論の機会を活用したかたちで、国内での研究集会を実施するとともに、学会大会における研究集会をフィールドスクールと連動させて企画開催する。</p>	
<b>委員構成 (委員名 (所属))</b>	委員公募の有無：無  主査：工藤和美 (明石工業高等専門学校) 幹事：神吉紀世子 (京都大学)                  小浦久子 (神戸芸術工科大学) 委員：植田 暁 (景観ネットワーク)         川口友子 (農村開発企画委員会) 月舘敏栄 (雪国文化研究室)            西嶋啓一郎 (日本経済大学) 不破正仁 (東北工業大学)                大和田卓 (日建設計) 熊野 稔 (宮崎大学)                      天満類子 (広島工業大学) 福島綾子 (九州大学)                    宮川智子 (和歌山大学) 山口尚之 (タステンアーキテクツ)	
<b>設置 WG (WG 名：目的)</b>		
<b>2017 年度予算</b>	120,000 円	ホームページ公開の有無：有 委員会 HP アドレス： <a href="https://www.facebook.com/Cultural.Landscape.AIJSUBCOM">https://www.facebook.com/Cultural.Landscape.AIJSUBCOM</a>

項 目	自 己 評 価
<b>委員会開催数</b>	1 回 (年度内計画を含む)
<b>刊行物 (シンポジウム資料等は除く)</b>	
<b>講習会</b>	

<p>催し物 (シンポジウム・セミナー等) *能力開発支援事業委員会 承認企画</p>	
<p>大会研究集会</p>	<p>1. PD: 空間創造が風景をまもる時 — 文化的景観の進化的保全と建築・デザイン (農村環境共生小委員会と共同) 参加者数 58名 『農村計画部門パネルディスカッション資料: 同上』</p>
<p>対外的意見表明・パブリックコメント等</p>	
<p>目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)</p>	<p>1. 2017年度大会のPDを主催した。「空間創造が風景をまもる時 — 文化的景観の進化的保全と建築・デザイン」というタイトルで、国際および分野横断的なPD企画とし、欧州・アジアとの交流、また、芸術・設計・計画の各分野の実践活動家による文化的景観への関わりへと、研究領域を広げる企画とした。パネリストは日本の写真芸術、インドネシアのパフォーマンスアーティスト、ドイツの都市計画、日本の建築設計の各分野の5名が登壇し、風景と呼応する空間創造の試みと文化的景観の保全について議論を深めることが出来た。</p>
<p>委員会活動の問題点 ・課題</p>	<p>1. 文化的景観のフィールドは地方都市が多く、催し物は関連する地域に関わっているメンバーが中心となって実施することになるが、移動経費や日程などから、なかなか委員会メンバー全員が参加できるように設定するのが難しい。</p> <p>2. 国際化が本小委員会の目標であり、ネットワーク環境や議論の機会のづくり方など、研究とともにしくみづくりについても、今後検討する必要がある。 Facebookの小委員会サイトの閲覧数は、以前の大会PD等で交流が深まったインドネシアからの閲覧数を中心に増加している。</p>